



雲雷鼓擊電
降電劇大雨
念彼觀音力
旋時得消散

雲
岫
間
雨
夜
月

六

^ 13
2897
6止



13
2897
6

手鑑

福嶋屋

雲妙間雨夜月卷之五

東都

曲亭馬琴編次

第十一套

桑の真才達夫

延文二年五月四日の朝近江國愛智川武佐の同雷雨甚しく琵琶湖の水を巻うづろと云々。射鱸するんど活るる雨は難く降と
 續一。即供るれど民間ハ戸を垂らるる。瞬ハ昨夜のやう小釣もあつた。
 のの松葉折焼く。時々ぬ蚊火を燻ら。或ハ云何を言ふ。普門品
 を讀むのり。そ小幡の高賈友定物右馬ハいゆる羊園司の威徳よ
 うて失ひつる黄牛をさう復一。忽地ハ憤を洩るる。今年ハるる牛
 の数お母く養殖し。塩を草津へ積送り。活業のさう。いゝ宜かり。
 云々。ふとの日。雷雨。牛小屋の屋棟を吹剥。且牛ハさう直儒イ

雲色月卷上

昭和九年
七月四日
購本

めつゝあど。物右集つ。慌忙つ。牛牽の男どもを。屋の上よの舟。塩薦と
 膏うけ。雨漏を禦まゆんとも。主従りと置く罵りのおぼも。雷火
 一發し。車輪のどを天火頂の上お落かおとええ。直に屋棟と衝破
 了。怒る牛の間へ墮と落る音。天地を御音して。おそろ一息どひえりは。
 らん。駭を。彼黄牛へさうらう。近曾駭の金をめく。購はるし牛ども。立
 七頭驚し。うらうらを男どもへ忽地は氣をうらむ。屋棟より滾落て背
 を駭らるものありたり。その中へ猛た牛牽ありて。これをうらむ物
 ありて棟抄より著つ。雲に乗らんとつるを。鞭りく矢庭は赤落し。押
 ら。雲をわけらるが。おそろは煙は畏れ。の。おそろ。さふ。これ
 らるもの。びて雲散り。雷鳴もあさうらう。物右集つ。人を医師の家
 へさ。迎へ。火傷をるもの。氣をらむひつ。下男下女ホをえ。

お医師はさるる。目今雲は暴れ。暴雨ともは零る。小鮎
 仍涼の中はありて。さうくと交るを。おとさうて。さうと。さうの。下郎
 らう。さる。彼鮎をり。あるを。医師受りて昏倒する。胸の
 上は載る。鮎へる。さうと。且く。死する人云。ゆ。蘇り。医
 師。れをえ。さ。さ。揚記が簡便。ええ。参。歸。交
 門。五味子の四味を調合して。これと飲せ。との。下女連忙。煎ト
 果二三貼。け。腹用。その入ら。清。又雷火
 は火傷。る。降真番を焼く。その烟。燻。溜汁。竭て
 立地。乾。愈。辛。恙。を。物。集。事
 ハ雷声。驚。聾。と。これ。治。や。子
 一味。煎。用。汗。出。常。の。耳。

終る聴て成るほど。人物を思ふかふくありひ考めて。武章を係
 思さしたる。前の悪報をす。物の劇をうら。医師も入りて後彼猛
 と奴隸物を思つたり。今朝の霹靂をう。野の牛を殺し。家刀自
 聾とあり。その餘の。過半かたれをえられど。僕不思淺は雷公
 を生拘めたり。あふさふ仇を報ひたり。といはら。のよの物をこれ
 を笑う。冷笑ひ。む。朝夷三郎。和泉小次郎。えんどう。勇士と。雷公
 を生拘。といふ。夢も傳く。か。る。戯言のいひ。いひの。と
 ひひ。諭。実。り。も。せ。り。く。件。の。奴。隸。夫。は。焦。燥。さ。る。あ。れ。昔。の
 勇士は。勝。たり。實。言。が。虚。言。う。ま。う。え。り。と。い。ひ。く。牛。小。屋。ま。り
 あり。慮。う。け。る。肩。は。引。擔。う。ま。る。を。見。ま。す。雷。公。の。あ。り。て。法。師
 あり。落。る。と。た。よ。い。く。膳。を。打。つ。あ。や。半。死。は。い。く。を。衆。皆

あり。く。さ。ん。か。う。え。る。ふ。年。の。齡。の。ま。ご。三。十。二。至。り。ど。面。色。白。く。頬。
 音。く。眉。黒。く。唇。赤。く。あ。が。夫。婦。は。い。も。さ。り。ま。り。と。れ。を。え。る。め。大。は。呆。て
 り。後。の。ふ。い。か。や。雷。雨。の。と。た。竹。魚。の。降。ハ。常。の。ま。る。ん。ど。天。地。開。闢。以
 降。法。師。の。降。る。と。い。ふ。の。ハ。ま。も。及。ぶ。ど。又。ま。の。雷。婆。の。ま。ん。ど。は。る。ハ
 の。れ。ど。そ。の。雲。は。駕。り。雨。を。お。の。の。め。の。あ。の。ぐ。口。置。く。て。声。の。雷。は。似。る
 を。い。の。の。の。海。坊。主。ま。ん。ど。い。の。の。龍。は。纏。揚。ら。し。小。魚。と。も。ふ。降
 ける。あ。や。い。と。怪。し。た。ま。り。と。い。ふ。當。下。物。を。思。つ。熟。と。い。の。法。師。を。え。り。大。は
 驚。た。ま。り。え。い。の。年。武。佐。の。獨。夫。雨。田。武。平。か。子。あ。り。い。と。ま。り。ま。り
 出。家。せ。り。西。管。と。い。ふ。法。師。と。名。告。ぐ。ま。家。の。黄。牛。を。社。騙。り。ま。り
 悪。僧。ま。り。汝。本。は。い。え。る。や。と。い。ふ。衆。皆。掌。を。拍。く。呵。く。と。い。夫。は。空。を
 ま。り。ま。り。這。奴。曩。の。黄。牛。を。盜。ま。り。今。又。野。の。牛。を。殺。せ。り。あ。の。

憎し。とて國司の館へ入る。縁由を訴めんとりたをたつ。物右衛門が妻
 へ聾く縁由を定りあはせもあはぬと。や雷神を怒りけしむ。さうく
 恨み憤り。候へり。罵り多し。さうばうら捨あべたよあはれとく。物右
 衛門へり。書は村長よ告るじ。それとゆふ雷神を牛牽ともふれ
 了。観音寺の城へとく。いそがとて。彼此の老弱。とや修く。雷公
 の法師さうり。るをせんとも。群集。とて。立在。うぶ街も
 挟うろりふたり。その日観音寺の城あり。端午の佳節。さうふり。と
 依く木家の諸臣。主君よ慶賀をまじり。退出るふ山田信二郎。詮通
 も。亭午の比。及よ。家は退く。妙は詮通の妻の代系とく。鎮守の
 神社へ詣り。いばり。さう。太は。詮通は佳節の祝儀を述出
 仕の勞を向慰るふ。詮通の書院の椽類は飾る。菖蒲太刀。子矢
 首鑑を指し。ちび吉ふり。やう。端午は旗を立り。矢首鑑をさうら
 めるふ。い。寺持院尊氏卿兵馬の権をさうり。とて。五月廿日。よ。は
 めり。信。さう。をり。習兵の基業とく。兩陣の形勢を併り。角と
 吹鼓を鳴ら。五回五色相及の旗を揚。互は先法主客の用と
 す。挑合。後。凱旋の景迹をり。これを賀。各つ。草教とて。
 草教の。塩尻三條篇。よ。え。或。後。よ。さう。と。愛。た。例。る。ふ。去。年。史。文。三。年。四。月。廿。九。日。
 尊氏卿覺。し。新將軍。戈。詮。朝。臣。其。表。を。美。嗣。と。天。下。の。御。
 守。さう。ふ。さう。と。演。武。草。教。の。嘉。例。備。怠。と。さう。と。さう。と。
 仰。さう。さう。と。か。詮。通。が。と。教。る。ぬ。陪。臣。も。い。さう。草。
 教。の。さう。擬。し。う。矢。首。鑑。を。さう。さう。と。さう。ふ。の。れ。は。子。矢。も。さう。の。の。
 ふ。の。心。業。と。達。を。り。造。ら。し。さ。入。云。礼。の。内。則。鶴。林。柔。弘。達。矢。
 王。露。等。乃。攬。

子生まうこれに對す。わう四方の志あるを示と。その父母これを教
 之れを予しを第一とせしり。夫桑ハ神木なり。方書之の功と稱す
 り。最精細し。又一種山桑あり。桑は似る。材弓弩に中るとりへの
 是なり。又蓬ハ禦乱の草とせり。本草木下集解本字通等の説とせり。これの
 弓矢を節物とせ。今日毎家ニ菖蒲を昔蓬を挿めたるをうらむ。
 菖蒲ハ蛇毒を解す功あり。その三種の草木。百邪を征す。夫より
 家ハ桑と蓬の弓矢をり。某玉に代るの之と。説示も太に吉ふく感
 嘆し。膝のそむをるる母その細しを同人とせ。おも小幡乃
 物右赤。所ま。とるるらら。と。怪し。法師を。縛る
 之。五三人の奴隸に担。村長ともみ。これを縁頼の下に川とえ。皆
 つい。わく。うら。と。や。その。朝驟雨。雷公。鳴。物右赤。つが
 牛小屋の。子。物右赤。が妻ハ。その。餘。或ハ昏倒。或ハ
 傷。の。の。幸。命。恙。を。る。み。れ。る。奴隸。を。猛
 く。矢。庭。に。落。る。雷公。を。敲。伏。せ。遂。に。縛。る。ひ。ひ。が。公。實。の。雷
 公。の。往。西。終。法師。と。名。告。り。物右赤。が。家。の。黄牛。を。杜。騙。す。ら
 なる。悪。僧。なり。怪。を。死。す。と。その。落。る。と。た。臆。を。打。る。醉
 る。が。ご。く。あ。く。同。の。應。ご。と。せ。と。う。く。引。来。う。う。祈。う。と。と。
 と。し。の。果。ご。も。太。に。吉。也。と。ん。又。母。の。仇。ご。と。う。れ。と。袴。の。そ。を。結。あ。び
 扱。む。か。う。と。取。勢。う。る。を。詮。通。尻。目。に。か。け。く。これ。を。止。め。端。ち。う
 立。つ。雷。神。を。そ。ん。か。う。ん。と。物右赤。の。ホ。に。い。ま。す。と。の。の。霹。靂
 と。も。小。墜。と。る。ハ。理。外。の。奇。談。なり。う。る。べ。別。又。故。あ。る。べ。い。は。と。れ
 かく。も。あ。し。往。は。黄牛。を。奪。ひ。去。る。悪。僧。なり。是。非。を。論。する

子及びど。さうみ放一ぐら痺者なり。さうみ遊一そらひ論し。
 俄頃雑兵五七人をひびくりや。光僧昏絶さそらひも。驚き醒
 るん。背をひらき打くえらとらば。雑兵亦うろをひらき一人美ひを
 握り固め。やこまひつり。礮と打バ雷神因う。眼を睜。目驚た
 且呆ま。あひ惑へる気色あり。がぶむのりて。そのれをば。
 ろどくかく縛するぞとらひ。そのとらた詮通膝立る母。刀を突立
 つ。雷神を信とありとくりや。あひ小幡する。物を取つが牛小
 屋に墜る。縛らるるをとりどや。以のれくるはいぬる年物右
 虎つを欺る。黄牛を奪去り。瀬田の二郎次郎といふの又賣
 ぶ。彼を連累せり。憐れ二郎次郎の妻を喪ひ。子は別と
 刺底倉あり。はみ撞見直は怒り人ら。恨く。嫂を切害し。

ぶく罪の脱さるるをあらう。領主は祈り死を賜ひ予えらるるを
 する少年は。彼二郎次郎が兒子あり。太い吉と名づる。その母又母の
 仇を復さんとあふの。日夜寝食を安うせむ。その孝を天は通し。神
 明を憐れ。居るがその仇人あり。是併はが牛を盗むの悪報
 ゆらび物を取つは生拘らる。天細は遂に備う。ぞく首状
 せよといふ。太い吉の怒気面あり。刀の鞘を握り。詰て雷神を
 ぶく。あひ共天を戴ざるの誓あり。直は怒りも果どぶれど。
 今を下さる。國司の仰をすてぶらう。そ我の光僧。雨田の西僧
 彈号雷神と名づる。のくと名告る。天珠は伏う。ぞ罵る。雷神
 られをす。冷笑ひ。小ざう。た童が仇人ひら。さやどぶく。名告
 らせん。いぬる。秋神崎の狂女。蓮葉は結ぶ。寺は名告る。

をるぞ。あぢー故郷に立入り。小幡の商人を欺た。牛を奪ひ去
 へ。これを汝張に換。鎌倉へ寄く。ゆめく。箱根路ゆく。そと
 白雲黒雲の會し。底倉の里人を汗策。各寺に住持せ。あぢ
 もはか又は怒ら。あぢの世覺。彼地を脱去。昨夕。積山の麓
 を過る。雷獸の柄。夜をあ。これ。愛智川。小幡の
 何ら。朝雨を降。與に乘。不覺。雲を暗。悞
 物。あぢの捕。これ。國司。黄
 口。孩兒。何。退。飽。廣言。牙を
 せ。雜兵。外。聞。足。撲地。蹴倒。繞
 ち。離。ア。海。詮通。大。怪。獨。焦
 燥。雜兵。揚。打。群。れ。あぢ
 象。倒。破。倒。雷神。冷。笑。袖
 拂。去。後。日。裁。度。共。力。遮。り。苗。人。と。れ
 ば。ろ。と。小。撞。と。轉。覆。動。詮。通。焦。燥。長。押。る。
 蘿。刀。の。鞋。を。外。葛。直。の。人。と。を。の。く。や。と。を
 及。り。う。潜。り。跳。越。也。その。疾。と。電。光。の。閃。く。又。陽。炎。の。冲。ま
 似。り。太。次。吉。を。え。大。怒。り。縁。の。柱。を。こ。り。桑。の。言。は
 産。の。矢。を。刺。る。川。度。え。と。れ。雷。神。が。ゆ。び。唱。る。咒。文。と。の
 一。采。の。叢。雲。忽。然。と。天。降。る。彼。光。僧。を。畏。霹。靂。一。声。大。地
 を。動。し。と。走。る。電。ハ。碎。る。人。の。眼。を。遮。り。雲。井。遙。雷。神。が

をるぞ。あぢー故郷に立入り。小幡の商人を欺た。牛を奪ひ去
 へ。これを汝張に換。鎌倉へ寄く。ゆめく。箱根路ゆく。そと
 白雲黒雲の會し。底倉の里人を汗策。各寺に住持せ。あぢ
 もはか又は怒ら。あぢの世覺。彼地を脱去。昨夕。積山の麓
 を過る。雷獸の柄。夜をあ。これ。愛智川。小幡の
 何ら。朝雨を降。與に乘。不覺。雲を暗。悞
 物。あぢの捕。これ。國司。黄
 口。孩兒。何。退。飽。廣言。牙を
 せ。雜兵。外。聞。足。撲地。蹴倒。繞
 ち。離。ア。海。詮通。大。怪。獨。焦
 燥。雜兵。揚。打。群。れ。あぢ
 象。倒。破。倒。雷神。冷。笑。袖
 拂。去。後。日。裁。度。共。力。遮。り。苗。人。と。れ
 ば。ろ。と。小。撞。と。轉。覆。動。詮。通。焦。燥。長。押。る。
 蘿。刀。の。鞋。を。外。葛。直。の。人。と。を。の。く。や。と。を
 及。り。う。潜。り。跳。越。也。その。疾。と。電。光。の。閃。く。又。陽。炎。の。冲。ま
 似。り。太。次。吉。を。え。大。怒。り。縁。の。柱。を。こ。り。桑。の。言。は
 産。の。矢。を。刺。る。川。度。え。と。れ。雷。神。が。ゆ。び。唱。る。咒。文。と。の
 一。采。の。叢。雲。忽。然。と。天。降。る。彼。光。僧。を。畏。霹。靂。一。声。大。地
 を。動。し。と。走。る。電。ハ。碎。る。人。の。眼。を。遮。り。雲。井。遙。雷。神。が

をいへる。かく深山の住む人へありき。とちうごら。その煙を目當に。
 サ一山を下まぶ山賊と名へる悪僧。只二人さへ向ひぬ。木の枝
 と折焼つ。一壺の酒を燦るみぞありけれ。そのとと二人の悪僧は足
 音をきき雷神をえ入り。さうさうてり。吾儕からふあつさあつて。
 来ぬひつる。寔よんごらる。再會ありとらへ。その悪僧亦ハ列入あぐ。
 白雲黒雲より久。雷神もふうく飲び。さうさう。おれはさう。甚敷あり。
 汝亦ハ又りの比。う。さふさう住むと問ふ。二人答ふ。吾儕底倉を
 脱去るといへども。師又の往方とさふ。さふ。足柄山は躲ま。おれ
 ぞ。終は音耗る。さう。夜うくありて。捜出されん。と。後。二人の
 と。よ。東海道とのぼり。昨日の山よ。入りて。又舊の山客とせん
 と。正よ。一壺の酒。師又を。別後の情を述ると。おれ。

まづ三盃を酌かべ。といひも。更ぬ。雷神酒の壺。又さう。谷底に投
 らる。且。白雲黒雲。大お驚。さう。吾儕の好意を。おれ。化ん
 らぬ。ハ。刃。飲。さ。おれ。さう。の命。細。さ。の。を。と。吐。み。ぞ。雷
 神。竟。然。と。う。ち。笑。さ。さ。あ。り。の。理。さ。う。おれ。昨夜。鏡。山。の。雷。獸。よ。奇
 術。を。傳。授。せ。ら。ま。雲。よ。駕。一。夙。よ。御。を。隱。形。飛。行。ハ。い。も。さ。う。さ。う。
 水。脈。を。函。泉。を。個。ら。と。み。を。さ。う。と。只。津。と。さ。う。の。の。の。ハ。さ。と。酒
 と。の。り。陰。酒。を。近。つ。る。と。た。ハ。おれ。忽。地。破。ま。さ。う。おれ。び。行。ひ
 び。おれ。汝。亦。も。慎。む。酒。を。飲。そ。ま。今。酒。を。撒。さ。も。の。回。え。と。後
 示。さ。う。物。在。さ。う。が。為。ハ。生。補。さ。う。の。祝。音。寺。の。中。あ。て。傳
 の。索。を。脱。詮。通。が。薙。刀。を。屑。と。せ。さ。う。為。作。を。いと。狂。く。物。さ。う
 又。い。や。う。彼。二。部。次。帝。式。章。と。申。ん。が。児。子。今。祝。音。寺。の。城。中。



あはれ
おの山ゆえん
おの山ゆえん



たえ

多入吉

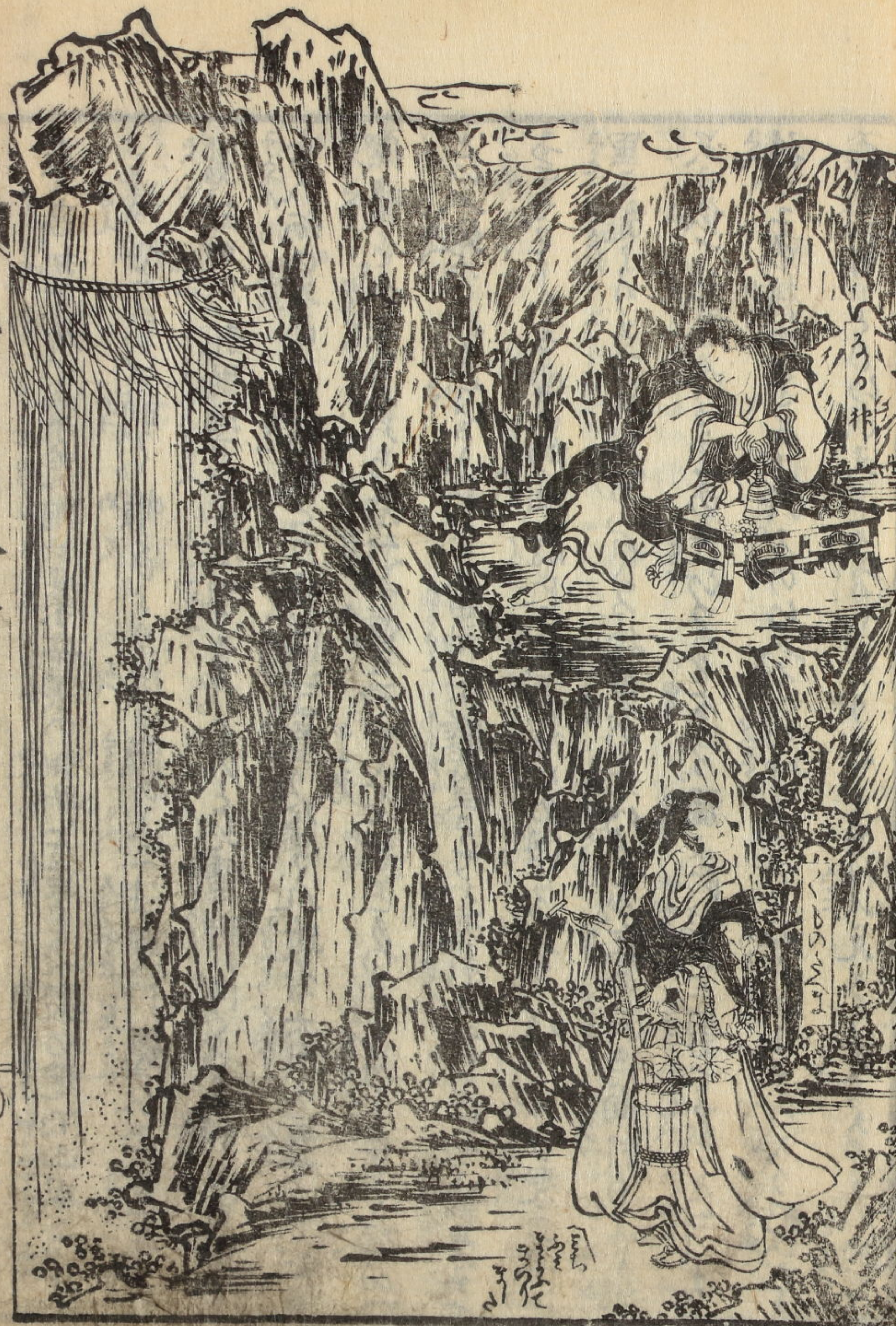
おの山ゆえん
おの山ゆえん
おの山ゆえん
おの山ゆえん
おの山ゆえん

おの山ゆえん
おの山ゆえん
おの山ゆえん

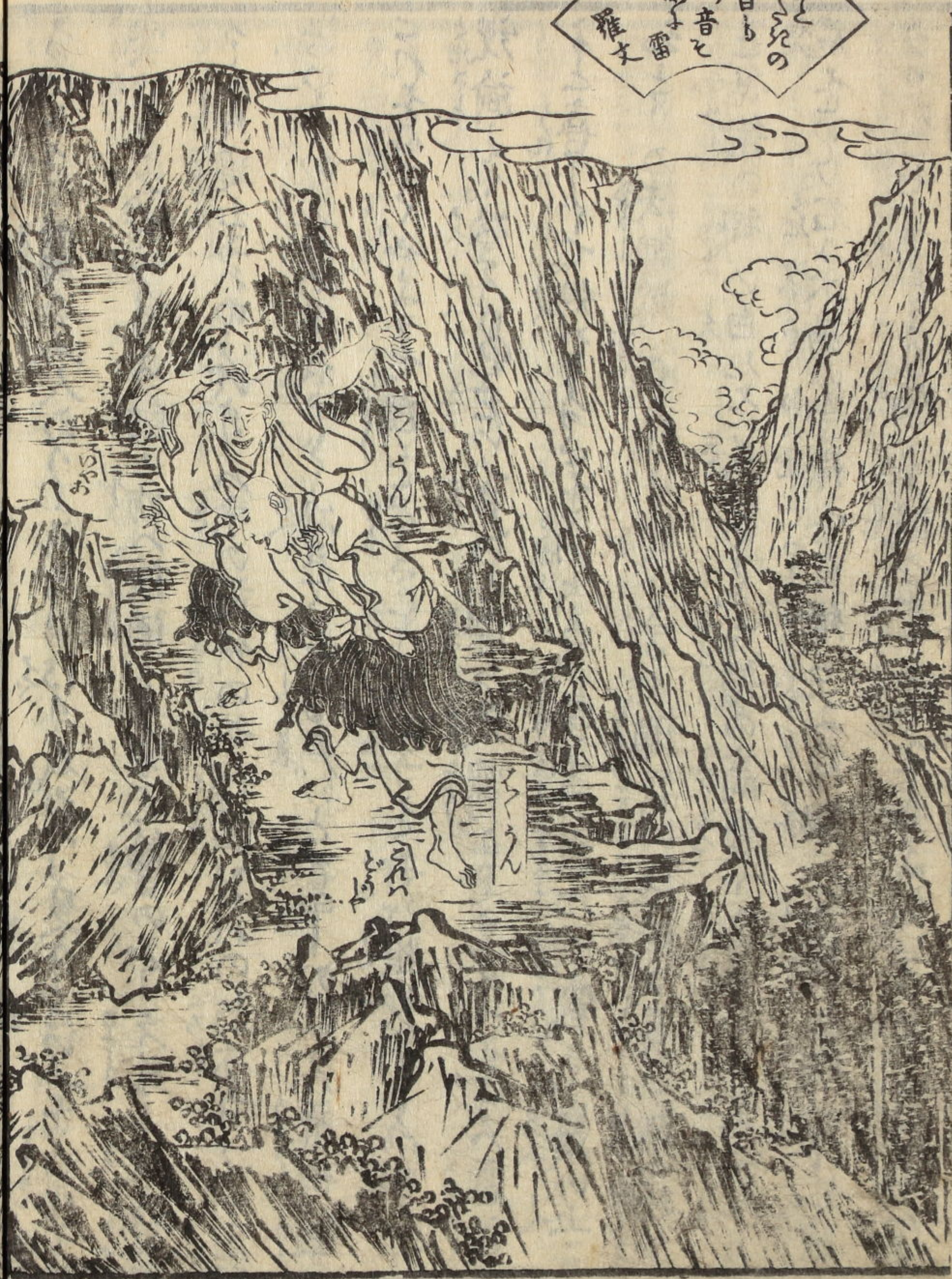
奇きまうらうらと嘆賞してゆび鷹の塚を拜し。遂に祝言と鏡と懐き
 して城中ふ立ちて詮通は縁由を告げられ。詮通はさうさう驚嘆し
 思致さうりさうり土中出現のまゝ依む。親音寺の本尊さうさう
 手さへ。郊外の小堂に置きたるあまのさうさう。今立地は雷神が在る
 ところの御仏の灵験ふらそと稱讚し。やがて國司は祈さうさうとてその
 夜俄頃に出仕し。主君氏頼との件の一五十二と笑えあげ。氏頼
 大に驚たり。城中の水さうさう。忌む。大に驚たり。汝もや。妙太
 次吉を扶く。彼悪僧を退治せよ。これ又殿の勇士に命じ。彼山の
 林よせさうさう。さうさう準備せよ。と仰られ。詮通はさうさう。若
 て家は退たり。妙太次吉は國司の仰を笑え。俄頃よその準備を
 してさうさう。次の日妙太の黒髪を剪て。此警經の垂尻の形状に
 打粉。素を羅衣。皂を袈裟。被花桶。酒を入さう。蓮の花と
 挿胸。鉢を頂。祝言の小像と蓮葉。鏡を掛。雄牛と撞
 木を握り。雌は花桶を引。朝さうさう。城を出さう。さうさう
 岩戸山へ赴く。太次吉は詮通さうさう。腹巻。小に臈當。蓑を
 さうさう。登さうさう。樵夫の山棒さうさう。俵は打粉。妙太の跡を跟て。さうさう
 山路を登りゆ。復さうさう。勇士許多。氏頼の命を受。蘇麻の樹間。なち
 のくれ。彼悪僧脱去さうさう。あまのさうさう。油。さうさう
 行。妙太の花桶を提。鉢を鳴ら。祝言の宝号と唱。岩戸山へ攀。登
 して。深谷地を帯。崖岸の形を數。高嶺。天は横。山岳の
 勢を刀。削。煙霞。泉石。分明。奇。妙。只の峯。さうさう
 たり。日。照。木の下。暗。細。葛。松。柏。の。巖。登。り。

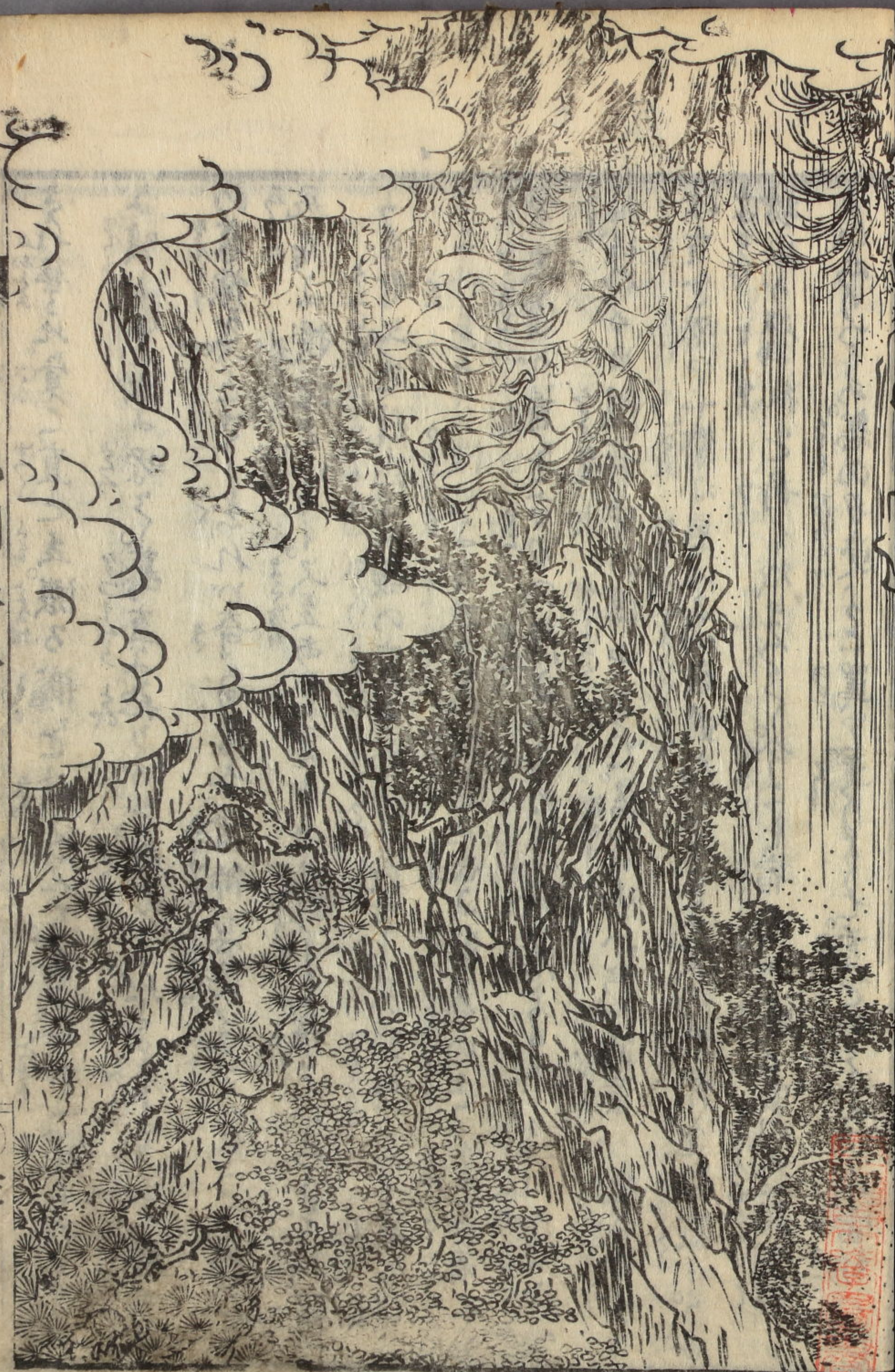
絶句

十一



ひとの
香も
くさの
あふ音と
雷
羅文





雲色問卷五

あつち
あつち
あつち
あつち
あつち



あつち

され發つれ覺て直と五張る籠を信とえて。さる少女謀られり。あ
 り腹にと天よ啜る。葛直よ飛るるを。妙はるるる。氣きもあ。觀世音
 の尊像をつとさ。多れが奇あるる。雷神忽池。是は痛く。とりど
 尻居よ撲地とせ。又まあぐるんとさる。おしも。誰とあさ。樹蔭
 けり打と洗現よ。額の真中打碎れ。その兇傍より果と仰こ
 子よ仰とりの。浩妙よ次ま。徑通と共よ腹巻の上よ。養美着て白
 雲黒雲が首を。方りの降よつらねた。樹蔭よりみられ。出のく小雷
 神。いの日視音寺の城中あて。名吉あたる。武章が児子伊原を
 次吉を怒る。驚小息入山田徑通り。ともよ。之の惡僧を誅戮。らふ
 妙法が魔術を折く。奴まら。今こそ宿志を遂る。あれ。天四討國罰。か
 りひあつら。怒の刃受くと罵とさ。首をあらんとす。小雷神のに

めと夢の覺る。か持し。中よおめり。いべんをありと叫び。身を起して嘆
 息し。それ幼より空門よ入る。父母の菩提を吊んとさる。妻亦中鹿小
 妾想悲及して。俗子よ誘る。罪犯を怨れ。差夫迷るる。今や煩惱
 の雲晴とさ。真如の月を。るるを喜。れと懺悔。妙法を乞ひと
 つ。籠壺よ撲地と投入。高野大師十喻第七。水月喻の句を。听せり。

桂影團と寥廓飛
 法身寂と大空住
 水中圓鏡是偽物
 如と不動為人説
 千河萬器各分暉
 諸趣衆生互入歸
 身上吾我亦復非
 兼著如來大悲衣

听了了。合掌。の。さ。と。と。父母の怒を復。あ。南無阿弥陀仏
 と念。れ。ら。と。な。吉。肉。の。首。池。上。落。り。け。



久旱逢甘雨他鄉遇
故知洞房花燭夜金
榜掛名時
右朱八咏四喜句

雲の
あつた
月
あつた
月
あつた
月

あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた

あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた

あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた

あつた

あつた

あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた



あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた

伊原多次吉

あつた

あつた

あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた
あつた

山田のあつた

わけて妙を以て其の詮通とも小麓より下りて勇士ホム會一。まづこれらて
 觀音寺の講よりまづ。國司氏頼は復讐の乃体をばえあび。氏頼は彼
 同胞が此度の功績を褒賞ありて。よづら引出物殿あり。且親世音の
 利益雲の山が忠魂を稱讚し。新に數間の堂宇を建立てて。彼觀世
 音を安置し。祈願所よまづ。次の日件の同胞小詮通
 とし。副て底倉へ遣し。武章が冥墳を祀ら。あ。その行妙を以て。國
 司の恩を拜謝して。詮通は伴を。日を強く相列底倉より到著し。父の
 墓より訪る。寺名寺より殿の施物を寄進し。且木賀光補より。奉
 ず。仇討の御告より。光補あり。その純孝を感懐して。次吉
 より。牙切草のゆを物う。その種を附屬して。養飼のゆを伴授せり。
 らよ至る。底倉の里人ホム。雷神が好悪をありて。武章を以て

惜と。その子とも。孝を以て類る。を嘆賞と。詮通は。妙を以て。吉を
 以て。近は。ぬり。日室所殿。彼同胞のゆを。食められ。お。その
 飼のよ。う。は。氏頼は。仰て。それを。落。其の。莊園。田園
 所を。あり。近臣は。加。ゆ。を。次。吉。の。妙。を。落。其の。田園。田園
 武士は。誓。縁。を。結。せん。と。詮通。とも。ゆ。を。相。結。り。妙。の。床。川
 氣。を。あ。仇。人。雷神。が。知。術。を。破。る。謀。も。め。れ。る。一。び。改。髪。吉。を。切
 は。衣。を。著。う。今。さ。う。人の。妻。と。あ。う。ん。還。俗。の。尼。は。侍。あ。べ。り。わ。り
 長。く。象。教。よ。か。を。委。ね。父母。の。菩提。を。吊。ん。と。を。願。ひ。れ。と。い。う。よ
 勸。れ。とも。聽。む。と。遂。に。祝。髪。受。戒。して。妙。雲。尼。と。は。名。を。よ。め。親。世。音。堂
 成就。と。い。う。氏。頼。が。妙。雲。尼。を。め。て。彼。堂。を。守。り。と。堂。料。を。奉。り。
 けり。その。夜。氏。頼。詮。通。妙。雲。尼。を。以。て。吉。ホ。ム。及。び。親。世。音。堂。を。定。む。

しじ岩戸山は五色の鹿あり。又その山は雪山といふ。沙門ありて、観音菩薩再興
の大願を發し。日夜普門品を流経せり。件の鹿流経の声をやて感佩
隨喜し。遂に雪山が草庵のほとりてを去らざり。あつらふ獵夫雨田武平これ
をうらて。普門品を誦する。日雪山が菴より鹿を窺ひ其処より五六
所を隔たる谷陰に到り。弓矢を伏て普門品を流し。五色の鹿流経の
声より。彼谷陰に未だ武平忽ち射てその皮を剥落し。推乃
わけて。其價は沽らんとす。折しも武泰武章が父伊原武俊といふ。めめ
新田氏光に従ひて京都にあり。武平が鹿皮をえて。數十金をりて。武平を
購て。行勝りて秘藏せり。其業因是彼に及して。鴉夫武平。武平
奇病に係りて世を去り。その子雷神法師の妻。鹿の声をやて
墮落し。且物をうらを知らんとて畜生を父ありと稱し。又武養武章夫

婦は横死せり。されば彼五色の鹿の神崎の蓮華と生れて。雷神が道かを
祀武泰武章は冠し。彼雪山の麓に生れて。又雪山の山といふれ。武章父子が
信義孝行を憐れ。それが乃ち身を殺し。観音寺の奉持仏を土中より
掘出さして堂宇建立の宿願を果せり。又小幡の物をうらぐ。父は。その比
落ありて。件の鹿の皮を媒し。武俊は買ひて。あつらひ。溜り利をぬた
るりの。その悪報より。その子物なる。雷神は牛を盗去られ。又武章を
雷の身も。後には零落せり。その子脱れが。其因果あり。さうす。前
生の悪報。娑婆。妙次吉が巨孝。親の冤を雪るの。さう。雷神も。又
嵐期は悟道せり。あつらひ。焼山の雷獸。雷神法師を痛めて。雨を
降さし。劫術を傳授して。袈裟を。許が。罪犯ある。えええ。よ。
近々よ。それを罰せり。めめ。あつらひ。と告め。あつらひ。覺て。後。よ。これ

